

大鏡『三船の才』定期テスト対策問題 | 現代語訳・敬語・文学史（解答・解説編）

解答・解説

1. 解答：（道長さまが）大堰川に舟遊び（散策）をなさったときに。「逍遥」はあちこちを気ままに歩き遊ぶこと。ここでは大堰川での舟遊び・遊覧をさす。「させ給ひ」は二重敬語で、入道殿（道長）への高い敬意を表す。
2. 解答：あの大納言は、どの舟に乗りなさるのがよいだろうか。「いづれ」＝どれ。「か」は疑問の係助詞で文末「べき」を連体形にする（係り結び）。「らる」は尊敬、「べき」は適当・当然。
3. 解答：もしこれくらいの（立派な）漢詩を作っていたならば、名声が上がることもいっそうまざっていただろうに。「ましかば…まし」は反実仮想（事実と反する仮定）で「もし…だったら、…だろうに」と訳す。実際には漢詩を作っていないという含みがある。
4. 解答：一つの事（一芸）がすぐれているのでさえ（たいしたことなのに）あるのに。「だに」は「…さえ」の意（最小限・類推）。一芸に秀でるだけでも大変なのに、という後文への伏線。
5. 解答：種類＝尊敬（二重尊敬・最高敬語）。敬意の方向＝入道殿（藤原道長）に対する、作者（書き手）からの敬意。「す・さす・しむ＋給ふ」の形で最高位の人物に用いる二重敬語。ここは道長への敬意。
6. 解答：尊敬。助動詞「る（らる）」のうち、ここは大納言（公任）が舟に「乗る」動作を高める尊敬の用法。受身・可能・自発ではない。
7. 解答：作者（書き手）の、入道殿（道長）に対する尊敬語。「のたまはす」は「言ふ」の尊敬語（「のたまふ」よりさらに高い）。発言者である道長を高めている。
8. 解答：種類＝丁寧。敬意の方向＝聞き手である入道殿（道長）に対する、話し手（大納言公任）からの敬意。「侍り」は丁寧の補助動詞で、会話文中なので話し手（公任）から聞き手（道長）への敬意。
9. 解答：反実仮想。「（未然形）＋ましかば…まし」で、事実と反する仮定とその結果の想像を表す。
10. 解答：「…さえ」の意（最小限の事柄をあげて、他を類推させる用法）。副助詞「だに」。「一事のすぐるるだに」＝一芸にすぐれることさえ。
11. 解答：（その道に）すぐれている・熟達している。「たふ（堪ふ）」は能力が及ぶ・たえうるの意で、ここは各道に堪能な（すぐれた）人々の意。
12. 解答：残念だ・くやしい。「口惜し」は期待どおりにならず物足りない・残念だの意。和歌の舟を選んだことへの公任の後悔の気持ち。
13. 解答：作文の舟＝漢詩（漢詩文）の才。管絃の舟＝音楽（楽器の演奏）の才。和歌の舟＝和歌の才。「作文」は漢詩を作ること。三つの道それぞれの名手を乗せた舟。

14. 解答：当時は和歌よりも漢詩（作文）のほうが格上とされていたため。和歌の舟で名歌をよんで評価されたが、もし得意な漢詩の舟を選んで同じくらいの作を残していれば、名声はあっという間上がったろうと考えたから。公任は三才すべてに通じていたが、より高く評価される漢詩で勝負しなかったことを惜しんだ。

15. 解答：(1)平安時代後期。(2)（老人による昔話りの）対話形式。(3)「四鏡（大鏡・今鏡・水鏡・増鏡）」のうち最初（一番目）に成立。『大鏡』は平安後期成立の歴史物語。大宅世継・夏山繁樹ら老人の昔語りという対話形式をとり、藤原道長の栄華を中心に描く。四鏡の最初の作品。